

「ほかの人が引き受ける」

使徒言行録 1 章 15～20 節

「天の父から聖霊が降る時、あなたがたは力を受けて、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリヤの全土、また地の果てに至るまで、わたしの証人となる」。弟子たちが復活の主から受けた約束です。ですから、祈りのうちにその実現を待つ生活が始まりました。今月の箇所は、弟子たちを中心に、イエスの母や兄弟たち、またイエスが生きていた時に近くいた多くの人々がエルサレム市内にある家の二階で心を合わせ、熱心に祈っていたその時、筆頭弟子のペトロが立ち上がって語り始めた場面から始まります。ペトロの説教と言えば、後の 2 章 14 節以降のあの有名な説教が頭に浮かびます。そこでは、「説教者ペトロ」の面目が遺憾なく発揮されています。それに比べると、今月の箇所では、「牧会者」とでも呼べるペトロの姿が大写しにされます。主イエスが天に挙げられて地上にいない今、弟子たちを束ねる責任者としてのペトロです。

復活の主は、弟子たちに命じられました。それは、主が公生涯を始めるにあたり、ユダヤ教の会堂でイザヤ書を引用してご自分の務めを説明した箇所で行われたことでした。ルカによる福音書に「貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれた。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」（ルカ 4：18～19）とある働きがそれで、これを弟子たちに直に託されたのでした。主は先に、「神の国を宣べ伝え、病人をいやすために、あらゆる悪霊に打ち勝ち、病気をいやす力と権能を授けて送り出す弟子たちを選び出された」（同 9：1～2）と、ルカは記しています。その数は 12 人で、彼らは主が命じた通り、「村から村へと巡り歩きながら、至るところで福音を告げ知らせ、病気をいやしました」（同 6）。主は、旅から帰った彼らからその働きの実について報告を聞くと、そのことで「聖霊によって喜びにあふれた」（同 10：21）と、ルカは重ねて伝えます。

しかし、今や、その主は一緒に居ません。委ねられた働きは依然として目の前にあります。働きは続けられなければならないのですが、12 弟子のひとりイスカリオテのユダが主を裏切り、自ら命を絶つたために、働き手に穴が空きました。残された弟子たちは 11 人もおりますので、空席のままそれが行われても差し支えはないように思われるのですが、ペトロは断固としてその空席を満たす必要性を訴え、「12」を揃えることに固執します。

そもそも「12」という数はイスラエル全部族の数を表すものです。イエスご自身が 12 人の弟子を集められたのもこれと無関係ではなく、イスラエル民族全体の救いを視野に入れ、ご自分の働きが漏れることなく行なわれるようにとの願いを込められた「12」と言う数字でした。ですから、「11」ではなく、「12」を揃えて万全の態勢で臨まなければならない。自分たちの現実や都合を最優先にではなく、主の御心^{みこころ}を最優先に。これがリーダーとしてのペトロの提案です。

「自分たちの現実や都合を最優先にではなく・・・」。実は、ペトロのこの思いは、提案の端々に ^{ほとばし} 迸っているように思えます。16 節に「イエスを捕らえた者たちの手引きをしたあのユダについては、聖霊がダビデの口を通して預言しています」と語る部分がまずそれです。主がご自分の働きを託そうと信頼して選んだその弟子のひとりが師を裏切る。その結果、主が無残な殺され方をする。他の弟子たちにすれば、同じ働きに呼び出され、多くの時間と事柄を共有した仲間が裏切りの首謀者であり、主を敵方に売り渡した。胸の張り裂けるようなこの出来事、目を覆い、耳を塞ぎたくなるようなその出来事の中に、弟子たちをはじめとする人々は置かれていました。弟子たちは、恐れと失意で無残に崩れ、傷み切っていました。イエスが十字架に架けられた後でさえ、周囲の目を恐れたために、遺体の引き取りにも出かけられないほどでした。

今、エルサレムの家の上階に集まっていた人たちは、弟子たちも例外なく、まだその失意と絶望の ^{ざんし} 残滓の中にいます。特に弟子たちにすれば、万全の数を欠いた今、主から託された働きを担い直さなければならない。どのようにして前に進めるでしょうか。今月の聖書箇所は、辛うじてその道を指し示します。それは、「起こった出来事を割引することなく認識して、そこから前に進む。主の働きを続ける」道です。

まず 18 節以下の、ペトロによるユダの最後の ^{てんまつ} 顛末の語りをご一緒に読んでみましょう。その箇所は、不思議なことに、福音書で伝えられているユダの最後の内容と少し違っていることに気がつかないでしょうか。これを伝えるのはマタイによる福音書ですが、それによれば、ユダは首つり自殺をしたのであって、18 節が記しているように「不正を働いて得た報酬で買った土地にまっさかさまに落ち」、その衝撃で「体が真ん中から裂けて、内臓がみな出てしまった」のではなかったのです。

普通ならば、思い出すことも厭わしい事柄を、ペトロは生々しく語る。まるでユダの行った事、ユダの身に起こった出来事を、あたりわさりのない表面的な表現にしたいかのように、まるで映画のワンシーンに出てくるような描き方で語ります。不思議に思います。まるで、この惨事を一刻も早くみんなの記憶の彼方に葬り去るのでなく、その悲しさ・陰惨さも含めて、それが実際に起こったのだ。その出来事をそのように自分たちの記憶に刻むことを通して、それを見据えて、そこから新しく歩みを始めよう。言外にそう意図されているかのようです。「現実をしっかりと見よう。そこから始めよう」とでも言いたいようにです。もしそうだとすれば、それはなんと「辛い」ことでしょうか。私たちには、思い出したくないこと、忘れてしまいたいことがあります。もう一度戻りたくない過去があります。しかし、ここでのペトロは、そこをこそ今一度、思い出すように仕向けます。

もし、ここでの弟子たちが復活の主に出会う前の弟子たちだったとすれば、孤独と恐れの中で傷み切っていた弟子たちだったとすれば、とてもそれには耐えられなかったに違いありません。しかし、今や弟子たちは復活の主に出会った後の弟子たちです。復活の主に出会った弟子たちはあの悲しみと痛みの記憶が満ちるエルサレムに再び戻り、主が約束なさったようにそこで天から聖霊が降り、力を得て地の果てまで復活の主の証人となる日を、再び主が戻って来られる日を人々と共に待つ新しい道に立つ者となっています。それは、弟子たちの失意と絶望のただ中に、その闇に、復活の主が命と光を携えて入って来て下さったからです。

ペトロを含む弟子たちは、復活の主に出会った者として、復活の主と共に、あの厭うべきユダの出来事を思い起こしました。主の復活の出来事を通して、あのユダの悲惨さを理解し直そうとしているかのようです。ペトロは続けて、16 節で「(イエスを捕らえた者たちを手引きしたあのユダについては、聖霊がダビデの口を通して預言しています。) この聖書の言葉は、実現しなければならなかったのです」と、ユダの出来事をすべて神の御手の中で起こった事として語ります。「あの酷く陰惨な出来事が、神の御手の中での出来事」とは！ そして、神がそれを全て予知しておられたとは！

これは、時折、私たちが自分で認めたくない出来事や整理のつかない出来事が起こった時の解釈として、「すべて神のご計画」と言いたくなるのと同じでしょうか。「解釈」は、英語で「interpret」と言います。ラテン語「prehendere (「つかむ」の意)」に語源を持ち、「両者」を表す「in」が頭について「二者間の仲介人となる」という意味を持つこの言葉には、「何かの間に入り込んで述べる」、また「ある物を平らにならす」という含みがあります。事柄を理解し受け入れるために、人間と事柄の間に立って説明を施し、解き明かし、意味するところを明白にする「解釈」という営みが行われるわけです。例えばルカによる福音書では、イエスの母マリアが天使ガブリエルから聖霊によって身ごもるというお告げを受けた時、驚き怪しんで「この挨拶は何のことか」と「考え込んだ」とあります。天使の挨拶の意味を理解しようとしています。起こった出来事を自分に都合のよいようにつじつまを合わせて考えるのではなく、実際に起こった出来事を水増しすることも割り引くこともなくそのまま受けて、「これはどういうことだろう」とその意味を思いめぐらす。私たちの知恵では理解しえない出来事を漠然と思いめぐらすのではなく、神の言葉から差し込む光の下で理解しようとする営みです。

ペトロは、ユダが引き起こした出来事について、聖書から出来事の意味を理解できるようにと試みます。20 節にあるように、ペトロは当時の人々が知っている聖書を、神の言葉である旧約聖書を用いるのでした。ここで引用されているのは詩編で、2つの異なる箇所が引用されています。前の方は 69 編 26 節、後ろの方は 109 編 8 節であると言われています。

ところが、この2つの詩編の箇所をここでのペトロの引用の言葉と比べると、それらは微妙に違っていることに気づかされます。詩編は両方共、苦難に遭遇している正しい者がその敵に向けた呪いの言葉です。とりわけ、2番目の「その務めは、ほかの人が引き受けるがよい」は詩篇では「地位は他人に取り上げられ」となっていて、その内容は「その役職をほかの人に取らせて下さい」という、苦難にある正しい人の呪いの言葉となっています。ペトロはそれを「その務めは、ほかの人が引き受けるがよい」という神の命令に言い直し、ユダが主を裏切ることで放棄した弟子の務めを神ご自身がほかの人に取らせるように命じた、と言っています。

その時、ペトロの心の内にあっただのは何でしょうか。今月の聖書の箇所からも読み取れるように、ユダの死によって穴が空いた「その務めは、他の人が引き受けることをもってでも続けられなければならない」という、悲壮な決意ではなかったのでしょうか。使徒としての務めは引き継がれ、主が託した働きは継続されなければならないからです。ペトロにとって、弟子の欠員を 12 に埋めることがそれで、働きが途切れてはならない必然は、それが「主イエスご自身の働きであり、主がそれを弟子たちに委ねられた」からでした。それが、ペトロにとっての信仰に基づく事実だったからです。

研究者は、「使徒の務め」の内容は民数記 27 章 16～17 節で説明されていると教えます。そこでは、民たちが主に、「共同体を指揮する人を任命し、彼らを率いて出陣し、彼らを率いて凱旋し、進ませ、また連れ戻す者とし、主の共同体を飼う者のいない羊の群れのようにしないでください」と懇願します。「その人」は人々の先頭に立って導き、闘って勝利し、進ませ、安全に帰還させ、常に共同体を見張る役目を負った人でなければなりません。信仰の群れを導き養う指導者である「使徒」たちは、このようなイメージで新約の時代にも引き継がれたのでした。

更に興味深いことに、旧約聖書においても新約聖書においても、「使徒」にあたる言葉は、使徒の務めを任された人よりも、その人を選んで務めを託した人の方に関心の重さを置いています。務めを託された人は、務めを託した人たちの祈り、その人たちの姿勢をそのまま映し出すという理解のもとで使われている言葉です。

ですから、聖書の教える「使徒」の務めは、人間の都合や現実をまづもって基準にすることで始めたり止めたりしてはならない。それと同じように、使徒の働きを担う人を選ぶのも、まづもってその働きを定めた方の、すなわちまことの羊飼いである神ご自身の御心に思いを傾け、それに沿って行われるべきであると固く信じられていたのではないのでしょうか。そのため、21 節以下に記されている欠員の補充は、ペトロの提案によって、「くじ」という仕方で、つまり人間の思惑や恣意を最大限排除し、ただ神の導きのみ委ねるという仕方で選ばれました。「使徒」の働きとはそのように、「働きは誰かに取り上げられてください」という呪いよりも、「その務めは、他の人が引き受けるように」という神の命令として語られるほうが相応しいと言わざるを得ません。

主イエスご自身は、旧約聖書の預言としての自らの働き、すなわち神の「救い」の働きを「弟子」という人間に委ねられました。しかし、ユダに象徴される私たち「人間」は、その委ねられた務めを、神の働きを自ら投げ出し、歪め、中断させてしまう者でもあります。それにもかかわらず、使徒が担う務めは、主ご自身が始められ、あらゆる事を貫いても進められなければならないのでした。変わる事のない主の御心は、人間の欠けや破れ、弱さ、過ちにもかかわらず、そして何よりも、私たち人間の神へ反逆と不信仰にもかかわらず、私たちの罪にもかかわらず、それを貫いて進められるのでした。主イエスがイザヤ書を引用して宣言されたご自分の働き、「貧しい人に福音を告げ知らせ、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げる」その「救い」のみ業が、その働きが、務めが、主の呼び出される者たちによって進められて行く。神の御心があるところに必ず、神の働きが始まるという約束です。

それにもかかわらず、相変わらず私たちは、ユダと本質的には変わるところのない者でしょう。真実、神が生きて力をもって働いておられることを現実のことと信じるならば、「御国が来ますように、御心がなりますように」と真実祈るならば、私たちは本当は、とても安穩あんのんとしていることは出来なはずです。それなのに、どこかに緩みを抱え、それを露呈している自分たちを見ます。「聖霊が降る時、力を得、地の果てまで、復活の主の証人となる」という約束を受けているにもかかわらずです。そのような私たちであるのに、主はなおも、その私たちにご自身の働きを託される。そのはかり知れない「恵み」と、それと表裏一体のようにして厳然とある「審き」とを思う時、襟えりを正され、身の引き締

まる思いがします。重たい、身に余る「恵み」です。その恵みに押し出されながら、自らの欠けも小ささも、不信仰もすべて身に負ったままで、丸ごと復活の主イエスに信頼して、託された務めに共に向かいたいと願います。